

2DB
MILITARY

玩具に
ランクアップ

金髪ド
の女上官の

新居佑

挿絵
もり苔

新米兵士
から

試し読み版

第一章 ドSな上官の、射精管理拷問!?

第二章 童貞卒業！でもこれって逆レイプ!?

第三章 露出射精訓練で、マジイキ!?

第四章 ソープパイプスリフェラは、最高!

第五章 孕ませセックスは正義!

006

073

121

183

219

登場人物紹介

ナターシャ・シロフスカヤ

圧倒的な美貌と戦闘能力を持つ、金髪蒼眼の少女。皇国軍遊撃魔法中隊・隊長を務め、性格はドS。周囲から「殲滅の魔女」と呼ばれ恐れられている。

アレク・ストロエフ

好待遇につられて入隊を志願した黒髪の青年。童貞。ある日ナターシャに目を付けられ魔法中隊へと転属を命令される。



「そら、そらそら……そおくらあ♪」

ナターシャは、まるで自分の掌で肉棒を扱っているかのように、悦に入ったりリズムカルな上下動で、オナホールを動かしてくる。

視界が遮られた中、感覚が勃起チンポに集中し、感度が普通の何倍にもなっているような気がする。

しかも両手両足を、恥ずかしい格好できつく拘束されたままだ。拷問に耐える特訓ということで、泣き言や反論すら許されない。

初めての女性によるチンポへの刺激が、完全なる女性上位で行われていることに、男としての矜持きんじが強くなるが、同時に背筋をゾワゾワとした、妙な快感が駆け巡っている。

「お前のチンポは正直だな。こんな格好だというのに、まだまだ固く大きくなるぞ？ 気持ちいいのか、特務兵？ 女のわたしに……っ。ああっ♪ 敵であるわたしに勃起チンポをオモチャで扱かれて、気持ちよくてたまらないのかっ？」

「くっっ、き、気持ちよくなかない！ 俺は、絶対にこんなものには屈しないっ！」

ナターシャを上官ではなく、敵の女拷問士だと思い、強い口調で返すアレク。しかしその実、彼の下半身は、その性欲を引き返せないところまで、刺激され続けている。

ジユクツツ！ ヌチユツツ！ ジユチユジユチユツツ！

(くっつ、ふうつつ。やばい。めちやめちや気持ちいいぞ、このオナホールつつ！い、いや、この女の……ナターシャの扱き加減が最高なんだつ。あ、くうつ。裏スジを重点的に責めながら、絶妙に上下させて、俺を焦らしてやがるつつ。くそつ、このドS上官がああつつ！)

気持ちとは裏腹に、アレクのチンポはこれ以上ないくらい、太く勃起している。

こちらは目隠しで見えないが、ジユクジユクと、オナホールを扱いているナターシャからは、半透明の淫具に包まれていながらも、肉茎の血管の充血具合がはつきりと目に見えるはずだ。

小動物のようなナターシャに、大の男が、逆に掌で遊ばれている恥辱感。

本当に拷問……いや、女性完全上位の調教を受けているかのような気分させられていく。

ジユチュジユチュツツ！ヌプヌプツツ！ジユジユチュウウツツ！

「はあ、はあつつ。う、くうつつ。あ、ううつつ」

(こんな恥ずかしいのに、くそつつ。ヤバいくらいに気持ちいいつ。足が震えて……俺、この女に弄ばれてる？うおつ、今度はそこまで……うううつつ)

椅子に縛られたアレクが、ビクンツと半脱ぎの上半身を震わせる。

チロチロ……ペロペロオオツ。

ナターシャは、その小柄な身体をよりアレクに密着させ、露わになって乳首に舌を這わせると、チロチロと、まるで子犬のように……しかし明らかなSっ気をもって、舐め始めたのだ。

「どうだ？ 目隠しをされたまま乳首を舐められると、気持ちいいだろう？ 男のくせに、こんなに乳首を固くして……。恥ずかしいとは思わないのか？ 相手は無慈悲なテロリストで女。皇国の軍人は、変態DMの集まりなのだなあ」

自分も皇国の軍人だというのに、どの口がそんなことを言うのか、と反論したくなかったが、実際、ナターシャの責めには、アレクすらも知らなかった、自分の秘めた性癖をさらけ出されてしまうかのような、恐ろしく、屈辱で、そしてどこか、解放的な快感すら伴う、イケナイ感覚に陥ってしまう予感すらあった。

なによりオナホールによつて扱かれて続けている、勃起チンポの快感の高まりが、もう切実だ。

（やばいっ。中隊に入ってからこの方、オナニーする時間も体力もなかったから。溜まりまくってて……。はあはあ、上がってくる。溜まりに溜まった精子が……。くうっ、チンポの奥で湧き上がろうとしているっ！）

久しぶりの男の快楽が発露しようとする感覚に、アレクは必死に抗おうとした。別に魔法のことさえしゃべらなければ、射精しようが問題ないはずだが、男としてのプ

ライドが、女性に……しかもこんなドSの少女にイカされることをよしとしない。

「おおつ、ド変態の肉棒が、ビクビク震えて……。これは限界、というやつかな、特務兵？ さあ、気持ちよくなりたいだろう？ 女のわたしの前で、浅ましい男根から、はしたないザーメンを思い切りぶちまけたらどうか？ ならば吐け。お前たちが使う魔法。その秘密をっ！」

シコシコシコつつ！ ジュクンジュクンツツ！ ペロペロレロオオツツ！

「う、あつつつ！ くふううつつ！ 誰が言うものかつつ！ 俺は誇りある皇国の軍人だつつ。快樂などに負けるわけにはいかないんだよつつ！ う、くううつつ！」

（ありえねえ。こいつ、さらにオナホールを激しくつつ。それになんて汚い言葉遣いだ。見た目可愛いんだから、もうちよつと控えめにすれば……。うくうつつ。でも、うま、いいつつ！）

これが、ドSがもつイジメの本能というべきなのか。

ナターシャは、オナホールのストロークの距離、そしてリズムを短くし、裏筋、そして雁首という、亀頭付近、男の快樂神経の中樞を、ここぞとばかりに徹底的に責め始めたのだ。

しかもアレクが女免疫ゼロの童貞チェリーであることをあざ笑うかのように、より身体を密着させ、舌先だけでなく、その柔らかい女肉すらも、露わになった胸板に触れさせて

くる。

初めての女性のボディタッチは、アレクの肉棒への快感をさらに高め、乳首まで、固く勃起しているのがわかってしまう。

「まるで女の乳首のようだな、特務兵？ わたしに舐められると、ほら。レロオオッ。ちゅぶっつ、んちゅっ、チロチロ……んふっ、小豆のように固くなって、かわいいものだな。もっと苛めてやりたくなるよ」

言うが早いか、オナホールを握ったナターシャの力が強くなり、再び亀頭から玉袋までの長く、そしてゆつくりとした、じわじわ快感が滾るたぎようなストロークに変わる。

ジュルジュルツツ。ヌチュヌチュっつ！ ビクビクンツツ！

「ふぐっつ、くうっつ……あ、おっ、うくうううっつ！」

「チンポの方も、オナホール越しに、熱いのが伝わってくる。変態ドM男め。このジュクジュクという、いやらしい音が聞こえているか？ これがお前のチンポが悦ぶ音だ。ああ、なんとという情けなくていやらしい音なんだろうな。お前は正真正銘のドMだ。さあ、ザーメンと一緒に、魔法の秘密もぶちまけてしまえっつ！」

今度は、半ば力任せに亀頭付近を積極的に責め続けられ、陰囊から熱い精液の塊が、もう我慢できない領域まで上がってくるのが、アイマスクをしていてもはつきりとわかる。
（あ、うおおおっつ！ やっぱりこいつ上手いっつ！ だ、だめだ。射精するっつ。女の

上官に、ナターシャの前で、思いっきり濃いやつをぶちまけてしまおうっつ！)

アレクの腰が、グンッと浮く。

両腕を後ろで縛られ、両脚などは、恥ずかしすぎる大の字開きで拘束されているはずだ。視界が遮られているだけに、実際よりもはるかにいやらしい自分の姿を想像し、悔しいことにそのすべてが、自慰など比べ物にならない、ゾクゾクした快感に変わっている。

「さあ、出せっつ！　しゃべれっつ！　己の無力さ、変態さを詫びながら、わたしの前で射精しろっつっ！」

胸板の前で乳首を舐める彼女の吐息が、ハアハアという熱いものになっていく。拷問役らしく、ナターシャもテンションが上がってきたのか、戦場での訓練のように、喋りが熱を帯びてくる。

その感覚が、偶然にもアレクに、これまでの訓練でナターシャに叩き込まれた軍人としての矜持を思い出させる。

「……い、いやだ。絶対に秘密はしゃべらないっつ。たとえ射精させられたとしても、俺は皇国の軍人だっつ。くうっ、俺を仕込んでくれた上官のためにも、絶対に屈しはしないっつ！」

自分でもなにを言っているのかよくわからなかった。

散々、きついめにあわされてきたナターシャに対する意地ならわかるが、ナターシャを

擁護するような意見が、とつさに口から出るなんて。

その言葉は、ナターシャも意外だったらしく、一瞬だが責めの手がわずかに弱くなり、声が若干上ずった。

「……ほう？ 上官に対する恩か。駄犬にしては、忠義なことだな。しかし……っ」

さすがは軍人家系のエリートだ。動揺もつかの間、オナホールの動きは、その速さといじらしさを取り戻す。

グチュグチュグチュツッ！ と先走り汁がオナホールの中で溜まり、混ざりあいシェイクされる、とんでもなく卑猥な音が、鋭敏になった聴覚に響いてくる。

「くあつつ、う、くううううつつっ！」

（だ、ダメだ。もう限界だつつ！ ザ、ザーメン出るつつ！ で、でも……それだけだつつ！）

女の敵兵に性的に屈するという恥辱を与えることで、心までも折れるのではないかというナターシャの童貞いじりだったのだろうが、アレク自身の中には、すでに皇国軍の兵士としての誇りが、芽生え始めていた。

そしてその種をまいたのは、他でもないナターシャだ。

ナターシャのドS責めに屈したくはない。

と同時に、一人前の兵士としての道筋をつけてくれているナターシャのためにも、快樂

に屈したくはない……そんな複雑にブレンドされた気持ち、アレクに、敗北の言葉を口にするのをためらわせる。

「くうつつつ、うつつ……うううつつつ！」

腰とチンポをビクビクと震わせながらも、口を真一文字に閉じて、決してしゃべろうとはしないアレク。

その姿に、ナターシャは感心したかのように呟いた。

「やはり面白い奴だな、お前は。上官のため……か。ふふ、ではこれならどうだ？」

ナターシャの手の動きが速くなり、刺激された淫茎から、熱い精液がこみあげてくる。もう射精を止めることなどできない。しかし決して魔法の秘密は話さない。そうアレクが思ったとき。

「……つつつ!! んんつつつつ、な……つつつ!!」

ふいに目隠しが外される。

てつきりナターシャが、自分が射精する情けない姿を見せつけるためなのかと思ったが、現実はその以上にハードだった。

「な、なんだこれつつつ!! 俺のチンポがつつ。しゃ、射精できな……くううつつつ！」

信じられないことに、いつの間にかアレクの膨れ上がった巨根の根元が、魔法でつくられたとおぼしき、細くも頑丈な紐によって、きつく縛られていたのだ。

「お前の上官に対する熱意にほだされてな。お前の射精を封じてやったのだ。さあどうする？ 魔法の秘密をしゃべれば、チンポの封を解いてやる。皇国に、上官に対する忠を貫いている限り、お前は絶対に射精できないぞ？」

信じられないことを言う女だと思つた。

男同士の笑い話として聞いたことはあつたが、ドS女による射精管理——正直、これはヤバすぎる。

「くっ、は……っ。うくっ。あ、んんっつっつ！」

アレクの息がだんだん荒くなつてくる。

「ふふっ、お前のチンポは涙ぐましいな。ご主人さまが敗北を認めない限り、絶対に射精できないというのに……。ほら、見えるか変態男？ チンポがこんなにビクビクと震えて……先走り汁だけをプシュプシュ噴出して……。ああ、無様だな。たまらないぞ、まったく♪」

ナターシャの言う通り、アレクの勃起ペニスは、行き場を失つた大量のザーメンを、どにかして吐き出そうと、先端から根元までを必死にビクつかせている。

肉茎を走る血管は、破裂するのではないかと思えるほどに、太く熱く充血しており、まるで限界寸前の水風船のようだ。

「はあはあ……い、言わないって言っただろ？ くっ、このドS女がつっ！」

ナターシャが敵役であるということもあり、ここぞとばかりに毒づくアレク。



(……まったく、相変わらざる確かつ恐ろしい指示だぜ。これじゃ気を抜く暇なんかありやしない)

アレクはそう心でこぼしながら、壊れた建物の柱に身を隠し、立ったまま、スツとライフルを目標に構える。

アレクが握っているのは、通常のアサルトライフルのフレームを再設計した狙撃銃だ。射程はゆうに二キロを超える。

それを扱うアレクの任務は、長距離からの隊の援護である。

現在の目標は陸を走る巨大鳥型ロスト。ダチヨウとクジャクを合わせたような、体高三メートルを誇る危険度Bのダミー機械獣だ。

基本的な攻撃は、軍用車両すらも破壊する突撃力と、口からの火炎弾。

弱点は胸の冷却装置で、そこを破壊すれば、自らが発した熱によって、自爆を誘発できるはずだ。

幸い、こちらにも、先行している隊にも気づいていない様子はない。

ロスト自体は、その名のとおり、古代ロストテクノロジーの塊である。

そのため、ダミーロストとは、あくまで敵の外見、そして行動パターンを再現したものだ。

しかし相手は、ナターシャの軍への要望により、以前より格段に精密に再現されたダミ

ーだ。

相手の動きに明確な規則性は見られず、こちらが仕留めそこなえば、胸ポケットに付けられた、一種のお仕置き装置から、強烈な電撃が流れるようになっていく。（もちろん、これもナターシャの発案だ）

第一陣として訓練に赴いた隊員たちのほとんどが、その恐怖の電撃装置の餌食となり、大半が即キャンプの医務室送りにあっている。

「さて、次はアレクがいる第二隊か。それではその腕前を示してもらおうか？」

「イエスマムっ！ ロストを隊には近づけさせませんっ！」

金髪の上官に返事をし、集中力を高めていくアレク。

構成するのは、強力な貫通力を弾丸に付与する攻撃魔法。

まるで超大型のダチョウのように、気ままに動きながら、索敵を行っているロストの胸部を、よく狙う。

その距離、一キロ弱。

（こいこいこい……今だっ！）

敵がこちらに胸を向けた瞬間、アレクは引き金を絞り、ダンツと魔力弾を発射する。

ヒュイイイイ……ドギョーンツツツツ！

「ギ、ギギイアアアアアツツツツ！」

超高速で風を切って飛んだ弾丸は、狙い通り敵の胸部を撃ち貫き、見事破壊判定が表示される。

味方からは無線で感謝の意が伝えられ、アレクもそれにこたえる。

「……ふううっ」

「ふっ、だいぶ上手くなったな。魔力の密度も、構成力も上がっている。お前のマナは確実に向上しているぞ、なあ、アレク？」

「イエスマムっ。特佐直々のご指導の賜物でありますっ！」

響いたナターシャの声は、しかしアレクが持つ無線から響いてきたものではなかった。

上空にはたしかに軍服を着たナターシャの姿があり、二人の距離では無線なしでクリアに受け答えできるはずがない。

「当然だ。なにせ他の連中とは違い、わたし自らが……あ、んふっ、こうして四六時中、個人レッスンをしてやってるんだからな」

「くあっ、はっ、はいっ特佐っ！ こ、光栄の至りですっつ！ ああっ、くふうっ。あっ、ふあ、ああっ！」

アレクはナターシャの声に答えながら、切なそうな声とともに、地面を踏みしめている両足をブルルッと震わせた。

（あ、くうっ、この女……だんだんやるのがエスカレートしてきやがって……。ああう

つ、こんなの、隊長のやることかよ……(っ)

アレクは心の中で毒つきながら、視線を自分の股間へと移した。

「ふふっ、なんとというチンポだ。ビクビクとうれしそうに勃起して……。ああっ、先走り汁も濃いぞ。訓練中にチンポを弄^{いじ}られて、興奮しているのだろう、アレク？」

そこには、なんと上空でみんなを監視しているはずのナターシャの姿があった。

その格好は、軍服こそ着ているが、上半身は片側だけはだけけており、あろうことかナターシャの小ぶりのおっぱいが露わになっている。

ふるんと柔らかそうな乳房、その先端の乳首はツンツと固く勃起しており、鮮やかなピンク色の肉豆が、ピクピクといじらしく震えている。

「はあっ、んふっっ。乳首の先がジンジンくるぞ……。っ。自分のものとは思えない……。ああっ、ほらアレク？　これが女の勃起乳首だ。並の女たちよりは小さいかもしれないが、こんなにはつきりと見たのは初めてだろう？　ふふっ、ああんっ。んんっっ！」

そうアレクを煽るナターシャの格好は、あろうことか男の欲情をそそりまくる、魅惑的ながに股スタイルだ。

いつもピンつと背筋を伸ばしている印象しかない、ある意味きちつとしている金髪上官。それが、すぐ眼下で両脚をガバツと開ききり、その肉付きのいい太ももとふくらはぎを、ムニューツとくつつけあって、いやらしく腰を落としている。

ワンピースの軍服は、淫らにめくれ上がり、そこから覗く女性の性器の中心点……魅惑的な股間には、きつく切れ上がったショーツが、はつきりと見える。

そこにはジワアつとした、女のラブジュースがじつとりと滲んでおり、ムンツと広がる女の発情臭は、乾いた戦場の汗臭い空気を、この一帯だけかき消してしまったかと思えるほどに、アレクの鼻腔を誘惑し続ける。

「じゅるつつ、んちゅつつ。おつ、ああんつ。むふうつ、じゅるじゅるつ。んはああんつ。ああつ、またビクンツと震えて……。なんとという敏感なチンポなんだ。しかもこの溢れ出るマナ……。こんな状況でチンポをおつ立てて……。わたしのオモチャは最高のDMだな」
「イ、イエスマムッ。じ、自分は……。くつ、特佐にチンポをしゃ、しゃぶられて……。訓練中だというのに、チンポをフル勃起させていますっ！」

（く、くそつ。こんな恥ずかしいことを言わされてるのに……。ああつ、こいつの言う通り、チンポが勃起して……。き、気持ちいいっ。ああつ、ヤバイ。チンポを弄られると……。て、抵抗できねえっつ！）

アレクの魔法士としての潜在能力を引き出すには、極度の快感射精を大量に経験することで、精液に眠るマナの扱いを身体に覚え込ませるしかない。

その結論にたどり着いたナターシャがアレクに命令したのは、野外……。しかも他の隊員たちとの共同訓練中でのチンポ訓練だった。

上空のナターシャは、彼女が魔法で作り出した偽者であり、遠隔操作しているダミー映像だ。

本物は今こうして、アレクの足元にがに股で座り込み、むき出しの勃起ペニスを、自らの口の中に含んで、しゃべっている真っ最中である。

「んふっ、じゅるっ……。あ、ああつ。ふふっ、いくらわたしが迷彩魔法を、わたし、そしてお前のチンポにかけていると言っても、他人に見られるかもしれない状況に変わりはないのだぞ？　なのにこんなに堂々とチンポを大きく……。んぶっ、じゅずりゅうつ。あはあつ、ふふふっ、気持ちいいか、アレク。ああ、なんて素晴らしいオモチャだ」

自身にかけて完全迷彩魔法によって、アレク以外からは視認できなくなっているナターシャが、さも楽しそうに話しながら、膨れ上がった皮剥き亀頭を下から上へと、涎をたっぷりつけて舐め上げる。

「くふううっつ！　イエスマムツ。あ、ああつ。チンポの先は……。裏筋はキク……。つ。お、ああつ、んくううっ！」

ペニスをしゃぶるなど、まるで未経験のはずなのに、ナターシャはその鋭い雌のドS本能のせい、アレクが感じる部分を的確に舐めしゃぶってくる。

マゾの快感に目覚めたアレクと同様、ナターシャもまたサドの性的快感に、はつきりと目覚めてしまっている。

「じゅるるっつ。れろれろおおっ。んふううっ。やはり裏筋が一番弱いようだな。ふふっ、しかしそうは簡単に射精させんぞ。もつといじめてやる。いじめられ、焦らされることで、お前の才能は花開く。ドMの快感が高まっていくのだからな、アレクよ」

言ったナターシャは、あくんと、大きく口を開くと、あろうことかアレクの勃起肉棒を、その開いた口で、一気に根元まで呑み込んだ。

「んちゅううっ。むふううっ。んんっつ！んふふっ。じゅるううっ。じゅぞぞっつ。ちゅるちゅるうううっつ！」

「く、おとおっ！の、喉までチンポが届いて……っ。あ、ああっつ。くふっ、んんあっ、あっつ、あああっつ」

今は訓練中、隊のスナイパーであるアレクは、すぐに次のターゲットを狙わなくてはならない。そう頭でわかっているにも、股間から湧き上がる、野外フェラの快楽に、思わず悦びの声を漏らしてしまう。

「ふふっ、いい声だ。気持ちよくなっても、射撃をおろそかにするなよ？チンポで感じる快感。それによって溢れ出るマナをコントロールするんだ。そら、もつと気持ちよくなってやろう、ふふふ♪」

常人よりはるかに大きいアレクの勃起男根を啜えたことで、初めはわずかに苦しそうな顔をしていたナターシャ。

しかし、すぐにアレクの極太チンポに順応し、いじらしい上目遣いを見せながら、実にいやらしく逸物をしゃぶり立てる。

「んじゅるぶっ！　じゅぶっ、んはあ……っ。ふふ、だいぶ固くなってきたな。ほおら、アレク。乳首だけでは物足りんだろう？　わたしのマ○コ……んんっ、オナニーするところを見ながら、もつと興奮するがいい……っ！」

言ったナターシャは、あろうことかワンピースの軍服をたくし上げ、露わになったエロティックなデザインの下着を片足だけ脱ぎ、太ももにひっつけた。

そしてムワツと香り立つ、丸見えになった女蜜の入り口を、ゆつくりと撫でながら、その十分に愛蜜で湿った中心に、指を突きいれ、前後に動かし、自慰を始めたのだ。

（こ、こいつっ。俺に見せつけるようにさつきから……っ。でもあのマ○コに俺は童貞を奪われたんだよな。くっ、なんてエロいおっぱいだ。ポリウムは足りないが、形が俺好みのドストライクな丸みだ。ダメだ、チンポが感じるっ。ガチガチにな……るううっ！）

Sの快感を知った美しくも艶やかな自慰姿が、さらに下半身の快感を高めてしまう。

『おい、アレクっ。前方にロストだ。ちきしよう、ちようど道をふさいでやがる。そっちで早く排除してくれっ！』

「あ、ああっ。んふっ、わかった……。す、すぐに、くっ。撃ち抜いてやる……っ」
訓練中のアレクは、ナターシャのエロい姿ばかりに気を取られているわけにはいかない。

下半身を廻なぶられる官能を意識しながら、兵士としての敵……ダミーロストを撃ち抜かなければならないのだ。

（くっ、これだけの快感。それがすべて強力な魔力……っ！ 魔力量は圧倒的はずなんだ。集中、集中……っ）

ペニスが快感でビクつくたびに、身体中が大量のマナで満たされていくのを感じる。まさに感じれば感じるほど強くなる——。あとはその才能を、コントロールするだけだ。

「じゅるるっ、ちゅるううっ！ ふっ、舐めるだけではぬるいだろう？ やはりチンポはしごかれるのが一番感じるようだな。そおら、わたしのオナニーの音もたつぷりと聞かせてやるぞよ」

一キロほど先の熊型ロストに狙いを定めようとしているアレクを、あざ笑うかのように、ナターシャは唇を一気にすぼめ、グングンッ！ と首を前後に動かしながら、アレクの勃起肉棒を抜き立ててくる。

おまけに熟した女穴に突き込んだ指の速度を上げ、ジュブジュブという、彼女自身のいやらしいオナニー音を、より強く大きく響かせてくるのだ。

（なっ!! あっ、ああっつ！ これ、まるで口マ○コだっ！ やべえっ、本物のマ○コみたい、チンポ気持ちいいっつ！ この女、ふざけやがって……これじゃ狙いどころじゃ……あああっつ！）



いわゆる顔面騎乗位の姿勢で、ナターシャに跨がられているアレク。

ナターシャのほどよい大きさでありながら、破格の弾力と柔らかさを併せ持つ絶品のヒップが、顔面に完全に密着し、女性上位のクンニリングスを強いられている。

「お、ああっつ。これが顔面騎乗位かっ！ やべえ、息が苦しくて……ああっ、射精管理とは別の意味でナターシャに支配されてる感覚になる……っ。興奮する……っ。この体位、めっちゃくちや気持ちいいぞおっつ！」

すでに完全にM属性に目覚めているアレクは、男性に対する恥辱行為である顔面騎乗位を、心から悦んで受け入れていた。

「はあはあ、ふふっ。お前がいつ目覚めてもいいようにと、最高にエッチな下着を選んでおいた甲斐があつたな。どうだ、アレク。息苦しいだろう？ その中で舐めるわたしのマ○コ……ああんっ、気持ちよくてたまらないだろう？」

「た、たまりませんっ、特佐っつ！ んじゆるっ、ふむっ、じゆるるうっつ！ ああ、なんてエロい下着……いつつ。あつ、ペロペロっ。下品すぎてたまりませんっつ！ お似合いです、特佐っつ！ ああつ、息が苦しい……でも気持ちいいです……っつ！」

自分はずくづくマゾの変態に堕ちてしまったと、アレクは思う。

色っぽい黒のショーツのせいで、息苦しさが増す上に、その男を誘うような蝶柄レースの入った、エロエロのデザインは、視覚的にもたまらないものだ。

なにせ両目から数センチも離れていない位置で、ナターシャのぷりっぷりのお尻と、その艶やかなヒップラインを覆っている黒い下着が、上下左右に揺れ動くのだ。

それだけでも、興奮度は数十倍にはね上がるが、顔面騎乗位の真骨頂である強制クンニが、さらにアレクのマゾ快樂に火を点ける。

「んじゆるつつつ！　じゅぶううつつ！　ちゆるちゆるつつ！　ああつ、ふごおおつつ！　おつ、ああつ……い、息が……んじゅむううつつ！　お、ああつつ！　じゆるじゆるううつつ！」

顔面騎乗位では、女性側のお尻が、男性の顔を文字通り押しつぶすことも可能である。

尻の圧迫感のさじ加減を、跨がっているナターシャが完全に握っていることで、ナターシャの気分次第で、呼吸の難易度がまるで変わってくるのだ。

（ああつつ、密着されると息ができないけど……マ、マ○コを思い切り舐められる……つつ！　たまんねえつ、ナターシャの発情マ○コ汁つ、美味すぎるっ。おお、ああつ、でも息ができない……窒息するつつ！　ああおつ、もつと舐めないと……おおつ！）

射精以上に切実な、生き物としての呼吸の手綱を、ナターシャに握られていることで、今まで以上のゾクゾクした被虐感を覚えてしまう。

「ほら、どうしたアレク？　もつとマ○コを嘗め回して、わたしを気持ちよくさせないと……ああんっ、尻を上げてやらんぞ？　女の尻の下で窒息したなど……皇国の兵士として、



笑い話にもならんよなあっ？ あはあっ、もつと強く吸えつつ！ 舌をマ○コ奥まで……んはっ、ああっ……そこ、い……イイッ！」

先日のアレク主導のクンニと違い、ナターシャは自らの快楽を、文字通り尻に敷いたアレクに向けて、強く自己主張してくる。

もつと激しく、奥まで舐めてほしいと思えば、ギユウウツツ！ と窒息しかねない強さでお尻を顔面に押しつけてくる。

逆に、もつとじっくりとクンニの快感を味わいたいときは、どれだけアレクが舐めまくりたいと思っても、スツと腰を上げてくる。

雄の劣情を完全にあざ笑うかのようなSMプレイだが、アレク、そしてナターシャの二人にはこういったセックスがベストなのだ。

「おぶううつつ！ じゅずりゆりゆううつつ！ ふ〜、ふ〜~~~~つつ。べろべろつつつ！ ちゅちゅううつつ！ おおうつ、ナヒヤーヒヤとくしゃつつ！ んじゆるりゅううつつ！ ナヒヤーヒヤあああつつつ！」

（う、あああつつ。もうどれくらい尻を押しつけてるんだあつつ!! ああっ、俺の息がナターシャの汗と愛蜜に混ざって、すげえエロい匂いだ。ふうふううつつ、ずつと嗅いでいたい……けど、息がもう限界だつ！ 死ぬつつ、ナターシャああつつ、本当に尻で窒息するううつつ！）

病み上がりの身体が、数分間もまともに呼吸させてもらえないことで、全身が痺れていく。

しかしその切迫した状況にあつて、ドM快楽を発揮するチンポだけは、ビキビキにきつく勃起し続けている。

「んはああつ、いいぞおつ。チンポが勃起しまくっているつ。魔力がキンタマに溜まっているぞ、アレクつ！ はあ、んあああつ！ やっぱりお前のクンニは最高だ。あつ、んひうつ！ もう少し……もう少し我慢しろつ。はああんつ、わたしのマ○コも、お前の舌で……くひいいんつ！ キュンキュンしてる……ううつ！」

ナターシャは、お尻をどけるどころか、さらに体重をかけて、アレクの顔面にヒップ、そして完全に発情している淫らな女心を、ズンツツツ！ ギュウウウツツツ！ と押しつけてきた。

パツクリと開ききった肉ビラが、まるで淫らな食虫植物のように、アレクの口を余さず包み込む。

口と鼻いっぱいにナターシャの愛蜜と汗の混ざり合った、まろやかでいて香しい雌の味と匂いが広がっていく。

（はっ、あふううつっ！ いくら俺がマゾだからって……息ができないと……つ。でも、んはあつ、完全密着マ○コに、舌がチンポみたいに食い締められて……おおつ、すごすぎ

るっつ！ ナターシャの本気汁、美味すぎいいっつ！　　こんなチンポ立っつ！　　空息しかけてるのに……気持ちいいっつ！

アレクの顔は、酸素を求めて真っ赤になっているが、その悲壮感がすべて、たまらないMの快感に変換され、股間のペニスとギンギンに勃起していた。

肉棒の代わりに肉壺に突き入れられた舌先を、激しく前後左右に動かすと、無数の肉ヒダが舌を包み、なんともいえない柔らかさと温かさを感じる。

溢れるのが止まらない愛蜜で、顎がドロドロになりながらもジュルルッ！　とすすり上げる様子は、まるで自分がハチミツを舐める熊にでもなったような感覚だ。

「あつ、ふああんつ！　ああ、こんなにチンポを大きくして……っ。舐めているだけでは足りないだろう？　扱いてやるぞ、アレク。んあつ、だからわたしをもつと気持ちよく……するんだつ！　はあ、あはあんつ。イクときは一緒に……っ、あひいんっつ！」

ジュルジュルッ！　ズチュズチュッ！

ナターシャは顔面騎乗位で、お尻をアレクに押しつけたまま、そのビキビキに勃起した逸物に右手を伸ばす。

ぶくつと限界寸前まで膨れ上がった肉竿を、Sっぽくギュッと握り、自らの性的興奮の高まりに合わせ、ジュコジュコッ！　と猛烈な手淫を開始する。

「ぐぶうううっつ！　おああっつ、ふっ、ふうううっつ！　んぐううっつ！　ナターヒャ：

…んじゆるずぶううつつ！　じゆるじゆるつつ！　べろべろおおつつ！」
勃起ペニスを扱かれた瞬間、アレクの快樂雄本能が沸騰したように膨れ上がり、腰がビクンッ！　と大きくはねる。

ナターシャのマ○コの匂い、そして顔面に尻を押しつけられるという恥辱マゾ快樂、そこへさらに肉棒への手コキという直接的な雄の快感が重なって、アレクの興奮が一気に熱を帯びていく。

（おおおああつつ！　これ…一週間ぶりのチンポの刺激つつ！　しかもナターシャの手コキだぞっ!?　強烈すぎるつつ！　くおおつつ！　たまらねえつつ！　顔面騎乗位プレイ、真正マゾの俺にとっては最高すぎるぜええつつ！）

つい数十分前まで、意識を失って生死の境をさまよっていたとは思えない、自らの欲情ぶりに、アレクはより一層激しいクンニで、ナターシャの雌花を嘗め回す。

「じゆるじゆるつつ！　んふううつつ！　べろべろおおつつ。ちゅっ、ちゅちゅうつつ！　はっはあつつ！　んじゅちゆるつつ！　べろおおつつ！」

圧着してくるナターシャのお尻に、むしろ自分からさらに顔を押しつけ、恥辱のマゾ快感を解放する。

黒いレースのサワサワした触感と、蒸れた雌の匂いに鼻息を荒くしながら、ヒクヒクとエロティックに震える官能の窟穴を、舌で必死に刺激した。

「んあつつつ、はあんつつつ！ アレクうつつ！ あつ、はああつ。そうだ、それでいいつ。んふうつ、チンポからすごいマナの高まりを感じるぞつ！ あひうつつつ、わたしのお尻に敷かれて感じるんだつつ！ あつひいいんつ！ あつ、あああつつつ！ クルウツ、もうすぐクルううつつ！」

舌を入れたナターシャの膣がギチュギチュツとその食い締めを強めてくる。

溢れ出るラブジュースの味も、酸っぱさが抜け、だんだんとしょっぱい感じに変わってきていた。

（ナターシャつ、もうすぐイクのかつつつ!! ああつつ、俺のチンポもイクツツ！ い、一緒にイカせてやるつつ！ ナターシャと一緒に、俺もイクううつつつ！）

呼吸もペニスも限界のアレクは、舌を膣から抜き去り、トドメと言わんばかりに、前回ナターシャがクンニで最も感じた部位……膨らみきった皮剥きクリトリスに、思い切り深く口づけする。

チュツツツ、ジュジュウウツツツ！

「あつつつ、きやいいいんつつつ！ はあああつつ、ク、クリイイツツ！ クリトリス来たのかつ!! ああ、アレクつつ。お前もイカせてやるぞつつ！ チンポから魔力ザーメン吹かせてやるつつ！ あつつ、くああんつつ！ あはあつつつつつ、チンポ、イケえええつつつ！」

弱点である勃起皮剥け陰核を甘噛あまがみされたナターシャは、凄まじい快感で、思わず腰が浮き上がるのを必死にこらえ、アレクの顔面にきつく尻を、そしてマ〇コと陰核を押しつけ、グリグリつと腰を動かす。

さらに右手で握った淫棒の亀頭から裏筋にかけての、ペニスで最も敏感なところを、短い手淫のストロークで徹底的に扱きあげ、間接的な禁欲生活を送っていたアレクの男根を、久しぶりの射精絶頂へとゲンゲンと誘っていく。

「あつつ、ああつつ。先走り汁がこんなに手のひらにつ。なんて浅ましいんだ。ふふ、さすがわたしが見込んだ変態だな。はああんつつ、チンポがビクビクいつているぞ？ くふうつつ、イクんだ、アレクっ！ さつさとイって、早く魔力を回復させろつつ！」

「イ、イエフمامウウツ！ イエシユمامツツ！ お、んふ〜〜〜つつ、イエスマムツツツツ！ んじゆるりゆううつつつ！」

ナターシャのヒップの顔面騎乗によって、呼吸困難に陥りながらも、アレクはありったけの雄本能で、可愛らしい陰核を刺激した。

剥き出しのピンク色の突起に、軽く歯を立て、その状態で思い切り口をすぼめ、ジュゾゾオオツツ！ と吸い立てる。

吸われた陰核は、ナターシャの腰のようにビクビクビクウウツツ！ と口の中で震えあがり、すさまじいばかりの快感電流を、ナターシャに送り込んだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>